

長野県における文末詞「―シナイ」に関する一考察

土屋 歩美

はじめに

人が相手を誘いかける表現を勧誘表現という。共通語化が進む現代では、「公園に行こう」や「一緒にしよう」など、ウ・ヨウ類を用いるのが一般的である。また、方言は勧誘表現に限らず、共通語化が進むなかで衰退しているものが多いのが現状だろう。しかし、方言に関する調査は、方言に對する使用意識や使用実態を読み解くことで、ことばの生成や盛衰などを明らかにすることができる。さらには、新方言の発見やコミュニケーション論まで発展させることができる。そういった意味で、方言研究は非常に意味ある研究だといえよう。

本稿では、長野県における勧誘表現の実態を把握するため現在の使用実態を調査する。その中でも、文末詞「―シナイ」は、「行くしない」や「おいしいしない」など動詞・形容詞終止形に接続形し、主に長野県の若年層が使用している勧誘表現で、長野県特有の方言形式である。筆者も長野県

出身で、高校時代に友人の使用を聞き、自身でも用いるようになった表現形式である。この「―シナイ」表現は方言という見方をしていたが、本当に長野県の方言なのか、そもそも方言であるのかという疑問が、卒業論文の契機である。

しかし、この文末詞「―シナイ」に関する研究は非常に少ない¹⁾。現時点までの研究では、主に長野県北信地域の方言とされ、それ以上の研究はなされず、その後の様子が明らかにされていない。そこで本稿では、文末詞「―シナイ」の今日的な研究を目指し、「―シナイ」が長野県北信地域以外の地域でも用いられる表現であることを論証する。さらに現代の若者が好む表現形式にも着目しながら、「―シナイ」が果たす役割を考察し、新たな表現形式として提示することを目的とする。

一．先行研究

江端（一九七七）は、中部地方域に行われている方言生活のうち、勧誘表現「海へ行こう。」について諸現象を、①「イカマイ」「イコマイ」「イクマイ」類、②「イカズ」「イカザー」「イキヤシヨ」「イガンシヨ」「イキマシヨ」「イクベ」「エベ」「イカツ」、③共通語的な変化の事象と地域固有の事象の三分類から考察を行う。調査対象は老年層と若年層（中学生）である。長野県北部に住む老年層が「イクメー（カ）」「イカマイカ」「イガメ（ガー）」を使用しており、また、「イカズ」「イカザー」は類同事象であり、ナヤシ地方の勧誘表現を特色づけるものと指摘した。さらに、「シナイ」表現が記載されていなかったことから、調査当時「シナイ」表現は見られなかったと考えられる。また、愛知県の分布に関する調査と考察が多く、長野県における勧誘表現に関しては、老年層の使用実態を押さえるにとどまっている。

馬瀬（一九九二）は、長野県の勧誘表現に関して、南信地方、中信地方、東信地方、北信地方、奥信濃地方の五地方に分けて解説している。²²北信地方での勧誘表現は「ズ」「ヤシヨ」「ネーカ」「メーカ」が使用されると述べる。「マイカ」は木曾谷や伊那谷で盛んに用いられることを指摘したうえで、北信地方では中信地方と接する地域で使用され、地域の関連を物語ると述べている。東信地方の勧誘表現は、北信地方と同じく「ズ」が用いられ、加えて「ズワ」が音韻変化をした「ザー」も使用される。そして「メーカ（マイカ）」は、中信地方では用いられないと指摘した。その中信地方の勧誘表現は、「ズ」であり、終助詞「イ、

ワ、ヨ」などを伴うことが多い。また、「メーカ」は認められるが、若年層ではすでに使用されず、「聞く」ことばとなっていると論述した。さらに中信地方には「ジャンカ」形式もあり、若年層、大町市の高年層では女性、松本地方の高年層が使用している。また、「ヤ」形も「イケヤ」は高年層、「イキヤ」は中年層の女性と若年層が用いるとした。南信地方では、「ザー」や「ジャー」が「ズワ」から変化して、多く用いられる勧誘表現である。「メーカ」は若年層では用いられないとした。馬瀬氏は長野県の勧誘表現に関して多くの形式を列挙しているものの、江端氏同様、「シナイ」表現に関する記載は見られず、長野県における「シナイ」の調査はなされていないと考える。

彦坂（二〇〇九）では、東海・信州地方の勧誘表現に関して、「行く」を例に西部では「行コー」、「行コマイ（カ）」、中部に「行カマイ（カ）」が見られ、中部から東部・北部に「行クマイ（カ）」、「行カズ」があるとし、方言的特色や方言史について考察している。そして長野県の勧誘表現に関しては、前述の馬瀬氏の諸研究をもとに主に「マイカ」類を中心に考察している。南信州の上伊那地域一帯は「イカマイ（カ）」、中信付近の上伊那辺から北部は「行クマイカ」、南部で木曾地域は「行カマイ（カ）」、行コマイ（カ）」の併用、それより北部は上伊那と同一状況であるとまとめた。しかしながら、馬瀬氏の諸研究をもとに研究をしているため、長野県の勧誘表現における新たな結果は得られなかった。また江端氏、馬瀬氏同様、「シナイ」に関する調査もなされていない。

「―シナイ」に関しては、荒井(二〇〇〇)、沖(二〇〇三)に指摘がある。

荒井(二〇〇〇)では、長野県北信地域特有の文末表現「―シナイ」に関して、北信地域の若年層から高年層対象にアンケート調査を実施し、使用実態と発生について考察している。調査結果から、北信地域の多くの市町村で「使ったことがある」という回答が得られ、信州新町、上山田町、戸隠村、鬼無里村を除く北信地域の広域であり、上田市や松本市、明科市、穂高町、大田市などの中信地区は使用しないことから、長野県での「―シナイ」の使用は北信のみに限られると結論づけた。また用法に関して、アンケートではシナイの典型的な使用法を知るために具体例を挙げ、分類している。^③そこから、地域差はありつつも同意・推量、勧誘の用法がある^④と指摘した。また、「―シナイ」は共通語として認識して用いるとし、「気づかれにくい方言」の一つとした。しかしながら、荒井氏は調査前の段階で、「―シナイ」を北信地域特有の文末表現とし、北信地域以外での使用拡大の可能性は言及していない。

沖(二〇〇三)では、長野市で二〇年ほど前から聞かれるようになった新しい言い方として、「一緒に行くしない? (勧誘)」「このケーキ、美味しいしない? (確認)」を例に挙げている。これらは共通語の意識がある^⑤と指摘し、長野市若年層に広がったと述べた。また、『全国方言辞典』では、勧誘表現として、北信では「行カズ」、東信では「行カザー」、中信では「行クジャンカ」「行ケヤ・行キヤ」、南信では「行クメーカ」と言うことを指摘し、「行クシナイ?」については、北信の若年層の表現とある。

いずれも、「―シナイ」に関しては荒井氏同様、北信の若年層の使用を指摘するにとどまった。

以上が、長野県の勧誘表現の先行研究である。以下、「―シナイ」表現に関連する先行研究を挙げる。

井上(一九八五)では、新方言の定義がされている。「新方言」とは、①標準語として認められている形と違うこと、②現在の若い世代に向けてなお使用者が増えつつ(勢力を拡大しつつ)あること、③話し手自身が、非標準語として扱うこと(改まった場面よりは、ふだんの場面で多く使うこと)の三つの性質を持った言語現象であると定義した。しかし、本調査では、方言として使用しているものと、方言ではなく、共通語として使用しているとの回答が得られ、方言意識に差異が認められたことから、「新方言」には当たらないと考える。

三宅(二〇一一)では、「確認要求」について以下のように定義する。「確認要求」とは、話し手にとって何か不確実なことを、聞き手によって確実にしてもらうための確認を要求することをさす。さらに、確認要求には、命題確認の要求と知識確認の要求がある。命題確認の要求とは、確認の対象を命題の真偽とするもので、命題の真であることの確認を要求するのに対し、知識確認の要求とは、当該知識を聞き手が有していることの確認を要求するものと区別した。しかしながら、いずれの確認要求も、話し手の不確実なものを実にするための要求であり、「―シナイ」表現は「確認要求」と全く同じ性質をもつ表現とは言えないだろう。

米川（一九九六）では、「若者語」を以下のように定義づける。「若者語」は、①仲間内のことばである、②会話促進・娯楽・連帯・イメージ伝達・隠べい・緩衝・浄化などのために使うことばである、③規範からの自由と遊びの特徴を持つことばであると定義する。この定義を「―シナイ」表現に当てはめると、仲間内のことばであることや、親近感を持たせる機能を有しており、「若者語」と同様といえそうである。しかし、造形語を使用する娯楽機能、略語を使ったテンポの良い会話をする会話促進機能、視覚や聴覚でのイメージを伝達する機能、一般語を言い換えることで、人に聞かれると都合の悪いことを隠す機能、他者に対する批判的なことばの言い換えをする緩衝機能、その後を口にすることで不快な感情を発散する機能など、いずれも「―シナイ」表現とは異なる性質である。さらに、新たな語を造り出し、新たな意味と用法で使用する若者語とは、全く異なる表現形式だと考える。

以上のように、文末詞「―シナイ」に関する研究は非常に少なく、荒井氏、沖氏のように北信地域特有の表現として研究にとどまっているため、長野県広域での使用実態は見られず、従来の方言形式を用いた勧誘表現の先行研究においても認められなかった。また、「―シナイ」表現は、「新方言」や「若者語」の定義とは異なった特徴を示している。そこで本稿では、長野県全域における文末詞「―シナイ」の調査を行い、若者特有のコミュニケーションとして有効な形式であると論証する。

二．調査の概要

二―一 調査方法

二〇一五年五月、東海大学付属第三高等学校（現、付属諏訪高等学校、所在地：長野県茅野市（南信地域））に筆者の教育実習で担当するクラス三クラス（一年生一クラス、二年生二クラス）の生徒とその親にアンケート調査を実施した。また、親は父親か母親のどちらかに回答してもらうこととし、寮生活の生徒など親元を離れている生徒は、生徒自身のみの回答とした。回収したアンケート数は、高校生五七人（男性二八人、女性二九人）、親世代三〇人（男性九人、女性二一人）である。

二―二 調査項目

調査項目は、勧誘する際に使用すると考えられる従来の方言形式（六項目）と「―シナイ」表現を用いた項目を用意し、それぞれについて「使う」、「使わないが聞いたことがある」、「使わないし聞いたこともない」の使用意識、耳にした経験の有無をアンケート形式で調査した。

また、「形容詞＋シナイ」表現も動詞同様、使用意識、耳にした経験の有無を調査した。調査に用いた従来の方言形式（六項目）と「―シナイ」の計七項目である。

「映画に行こう」を例文として、従来の方言形式では、「映画行かズ」、「映画行かザー」、「映画行くジャンカ」、「映画行キヤ」、「映画行ケヤ」、「映画行くメーカ」の六項目と、「映画行くシナイ」である。また、「形容

詞「シナイ」表現の項目は、「このカレー美味しいシナイ」と「この服かわいいシナイ」の二項目である。そのほかに補助的な調査として、方言意識の有無を問う項目を追加した。

三、調査結果

三― 調査結果の傾向

調査結果全体の傾向としては、先に挙げた方言の多くは、衰退もしくは聞く方言となっていることが示された。以下、アンケート結果のおおよその傾向を各形式別に示す。

まず、「行かズ」は高校生のみならず親世代でも使用はなく、また耳にする経験も非常に少ないことから「行かズ」を用いた勧誘表現は使用されなくなつたと言える。

また、「行かザー」も高校生、親世代ともに使用はなかった。しかし、耳にする経験において親世代では、ある程度見てとれるため親世代以上の年齢、つまり老年層の人々が現在も使用していると考えられる。

一方、「行くジャンカ」では高校生に使用が少なからず認められるのに対し、親世代に使用が見られないこと、また高校生世代親世代ともに耳にする経験があることから若者が主に使用している表現だと考えられる。

「行きヤ」、「行けヤ」は勧誘表現において同じ「ーヤ」である。どちらの表現も高校生、親世代ともに使用は非常に少なかった。耳にする経験においては、「行きヤ」より「行けヤ」のほうが高いという結果となった。

「行くメーカ」は高校生でも親世代でも使用はなく、また耳にする経験も非常に少ないことから「行くメーカ」を用いた表現は衰退したと言えるだろう。

しかし、「行くシナイ」は高校生の使用および耳にする経験があるという回答が半数以上となった。対する親世代では、使用は少ないものの、子どもの使用によって耳にする経験が多少あり、やはり高校生の使用が多いことがうかがえる。「ーシナイ」は主に高校生、つまり若者が使用していると考えられる。

以下、右記の順に各方言形式の現状の分析・考察を行う。

三― 一 「行かズ」

各方言形式の集計は、巻末に表を示した。

「行かズ」を「使う」と答えた人は、高校生、親世代ともに皆無であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生親世代ともに三人であった。「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生五人（九三％）、親世代二人（九〇％）であった。

「行かズ」に関して、『全国方言辞典』（佐藤 二〇〇九：一三二頁）では「相手を誘うとき、たとえば『映画に行こう』を例にとると、北信では『映画行カズ』（後略）」と言うことが記載されている。また、江端（一九七七）の図 1 から、北信と中信の老年層が使用していることがわかる。しかし、馬瀬（一九九二）では、「ーズ」を用いた勧誘表現は長野県全域

で使用されていると指摘する。

高校生でも親世代でも「使う」という回答はなく、若年層とその親世代には、地域の別なく使用されていないことが分かった。しかし、高校生三人（五％）、親世代三人（一〇％）に、耳にした経験を確認できた。だが、高校生の耳にした経験において、アンケートには発言者（調査では、「使わないが聞いたことがある」と回答した人に誰が発言していたかを聞き、その人物を「発言者」とする）が、回答者の教師と答えたが、その教師の出身地や移住歴を推測することは難しい。しかし、中信出身の生徒は、発言者を自身の父親と回答しているため、中信での使用者がいるとも考えられる。親世代では、北信出身者が発言者を自身の叔父叔母と回答しており、北信でも使われていることが考えられる。また、南信出身者は、「以前は自分でも使用していた」と回答しているが、その移住歴には中野市が含まれているため、このときに「行かズ」を習得したとも考えられる。これらのことから、前述の『全国方言辞典』江端氏の記述は確認できたが、馬瀬氏の記述を裏付けることはできなかった。しかしながら、高校生と親世代の両方で九〇％以上が耳にする経験もないと回答していることから、現在長野県において、「行かズ」という勧誘表現は衰退したと考えられる。

三――二 「行かザー」

「行かザー」を「使う」と答えた人は、高校生〇人、親世代二人（六％）であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生八人（二

四％）、親世代一人（三六％）で、「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生四八人（八四％）、親世代一人（五八％）であった。

「行かザー」に関して、『全国方言辞典』では東信で用いられると記載されている。また、馬瀬（一九九二）は、東信と南信で使用されていると述べる。しかし、馬瀬氏の南信の地域は「下伊那、木曽および上伊那の南部」とするが、現在の南信は、諏訪、上伊那、飯田、伊那地域で異なっている。ここでは、現在の区別を用いる。

表のとおり高校生での使用は見られず、親世代では二人（六％）が使用するが、すべて南信出身者である。耳にした経験のある高校生は南信出身であるが、馬瀬氏の区別では中信および南信となる。また多くの発言者を祖父母と回答しており、南信における老年層が多く使用していることが分かった。親世代は南信出身であるが、馬瀬氏の区別によると中信にあたり、また一人は東信である。親世代のアンケートにおいて、発言者は自身の親や祖父母と回答しており、南信の老年層が多く使用していることが分かった。耳にする経験がないという回答は、高校生八四％、親世代五八％であったものの、親世代の四割は使用や耳にする経験があることから、現在でも「行かザー」は老年層を中心に使用者は多いということが分かった。馬瀬氏は、東信と南信での使用を指摘したが、馬瀬氏の地域区分に従うと、東信での老年層での使用が見られたが、南信での使用は認められなかった。この結果を現在の地域区分に当てはめると、南信での使用は見られたが、東信での使用は少ない。また、『全国方言辞典』の東信での使用という記

「行くジンカ」を「使う」と答えた人は、高校生三人、親世代では皆無であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生一〇人、親世代一〇人で、「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生四人、親世代二〇人である。

三一一三 「行くジャンカ」

「行くジャンカ」を「使う」と答えた人は、高校生三人、親世代では皆無であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生一〇人、親世代一〇人で、「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生四二人、親世代二〇人である。

『全国方言辞典』では中信で用いられると記載されている。また、馬瀬（一九九二）は、大町市の高年層が主として「ージャン」（原文マゴ）を用い、「ージャン」ないし「ージャンカ」（原文ママ）は若年層も用いる。松本地方の高年層では、男女とも友人同士、または子どもなどに対してこの形式を使用すると言及していることから、中信での使用が多いと考えられる。

本調査では、高校生三人が使用すると回答した。そのうち、二名は、現住所も出身地も南信であり、残りひとりとは、現住所も出身地も北信である。耳にした経験において、あると答えた高校生一〇人のうち半数が発言者を「友人」と回答しており、若年層の使用が多いことが分かった。しかしある高校生は、発言者を「祖母」としている。また親世代でも「友人」などと答える人が多いなか、ある生徒は発言者を「母親」としている。このた

め、使用しているのは老年層の女性がもっとも多く、発言者自身より若い人が使用していると考えられる。一方で、耳にする経験があると答えたなかで、高校生のうち、県外出身者を除くすべての回答者が、南信出身もしくは現住所が南信である。親世代では、五名を除くすべてが南信出身であり、現住所も南信である。また、耳にする経験もないものは、高校生四二名(七四%)、親世代二〇名(六五%)ともっとも多い。これらのことから、先述した中信での使用は衰退し、現在は主に南信の若年層が使用しているが、今後衰退する可能性の高い形式とも考えられる。

三——四 「行きヤ」と「行けヤ」

「行きヤ」と「行けヤ」は区別し扱うが、「ーヤ」形でまとめられるため考察は一括する。活用形の違いについては本稿の目的とは異なるため言及しない。

（一）「行きヤ」アンケート結果

「行きヤ」を「使う」と答えた人は、高校生はゼロ、親世代一人（三％）であつた。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生七人（二％）、親世代四人（一三％）であつた。「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生四八人（八四％）、親世代二六人（八四％）であつた。

(二)「行けや」アンケート結果

「行けや」を「使う」と答えた人は、高校生、親世代ともに一人であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生一三人(二三%)、親世代一〇人(三三%)であった。「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生四一人(七二%)、親世代二〇人(六五%)であった。

「行きや」と「行けや」に関して、『全国方言辞典』では中信で用いられると記載されている。馬瀬(一九九二)は、中信での使用と述べ、「行けや」は老年層、「行きや」は中年層の女性を中心に用いると述べる。また、若年層では男女の別なく「行きや」が用いられるという。

本調査では、「行きや」の場合、高校生での使用は認められず、親世代でも非常に少ない。耳にする経験においては、高校生も親世代でも一五%以下と少なかった。アンケートでは発言者を高校生は南信出身在住の「友人」と回答し、親世代では、中信出身在住の「友人」としており、中信と南信で、若年層と中年層において使用されていることがわかる。

一方、「行けや」の場合、高校生でも親世代でも使用者は非常に少ない。また耳にする経験では、発言者が老年層と回答しているなか、高校生のひとは中信出身在住、七名が南信出身在住である。親世代でも一名は中信出身在住であるが、二名は南信出身在住であり、中信より南信での使用が多いと考えられる。いずれも耳にする経験のない人は非常に多かった。ゆえに現在、長野県内において、若年層と中年層の使用者はほぼいないと考えられ、「行きや」形は衰退したと考えられる。しかし、「行けや」は、い

まだ老年層での使用があるためか、耳にする経験も多いのだろう。しかしながら、「行きや」「行けや」は中信での使用より南信での使用が多いと分かったが、これは馬瀬氏の地域区分に従うとすべて中信となるため、現在の中信より、南信地域のほうが「行きや」と「行けや」の根付きが強かったと推測される。

三―一五 「行くメーカー」

「行くメーカー」を「使う」と答えた人は、高校生・親世代ともに皆無であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生五人(九%)、親世代一人(三%)であった。「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生五一人(八九%)、親世代三〇人(九七%)であった。

「行くメーカー」に関して、『全国方言辞典』では南信で用いられると記載されている。馬瀬(一九九二)は、南信での使用が盛んであり、中信では老年層の使用が見られ、北信では、中信と接する地域で使用がみられることを記載している。

本調査で耳にした経験の結果では、馬瀬氏の地域区分に則った場合、高校生はすべて中信出身在住であり、もうひとりの出身は県外だが、中信に在住している。親世代の場合、南信出身中信在住がひとりおり、どちらの地区でもこの形式に接触する可能性が考えられる。しかし、これらの地域区分を現在の地域区分と照合すると、高校生・親世代ともに全員南信在住となる。発言者は主に老年層であったが、ある高校生は「友人」と回答し

しており、少なからず若年層に使用者が存在していることが分かった。以上のことから、『全国方言辞典』の記載のとおり、現在は主に北信で用いられていることが本調査でも確認できた。しかし、使用意識と耳にした経験から、使用しているのは主に老年層と考えられる。一方、馬瀬氏の地域区分どおり解釈すると、北信における使用はほぼなく、中信地方に接する北信での使用者も見られなかった。さらに、耳にする経験もないという回答が、高校生八九%、親世代九七%といずれも高いことから老年層においても使用が減少しており、現在の長野県内では、「行くメーカー」という勧誘表現は衰退したといえよう。

三―一六 「行くシナイ」

「行くシナイ」を「使う」と答えた人は、高校生九人（二六%）、親世代一人（三%）で、「使わないが聞いたことがある」は、高校生二〇人（三五%）、親世代六人（一九%）であった。「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生二七人（四七%）、親世代二四人（七八%）であった。

「行くシナイ」に関して、『全国方言辞典』では「北信の若い人々の言い方」とある。また、荒井（二〇〇〇）は以下のように述べている。

多くの市町村で「使ったことがある」という回答が得られた。逆に、「不使用」のみだったのは、信州新町、上山田町、戸隠村、鬼無里村である。ここでは使われていない可能性がある。（中略）少なくとも

上記四町村を除く北信地区の広域で通じると考えられる。また、北信以外では、「上山田市は使わない」という上山田市から通学する生徒の回答や、予備調査で松本市、明科市、穂高町、大町市など中信地区の出身者から「使わない」との回答があった。ここから、長野県内での「シナイ」の使用は北信のみに限られると考えられる。（荒井（二〇〇〇）一四―一六頁）

荒井氏は長野県内での「シナイ」の使用は北信のみに限られると述べるが、本調査では異なる結果を得た。

高校生で「使う」と回答した九名のうち、北信出身在住者は一名、北信出身南信在住者が二名、東信出身南信在住が一名、残り五名は南信出身在住であった。親世代の使用者も北信出身南信在住者であるため、南信出身在住者に「シナイ」が使用していることが明らかになった。耳にした経験があると回答した高校生全員が南信や中信出身在住であり、北信関係者はいなかった。そして、多くが発言者を「友人」としているため、学校で触れた可能性が高く、また北信のみで使用されていた「シナイ」が、北信以外の地域でも広がったと考える。親世代に「北信出身で友人が使用していた」という三名以外は、全員が南信出身在住であった。このことは、南信出身在住の子どもが学校で「行くシナイ」に触れ、自身も使用するようになり、親に対しても用いたため、親が「行くシナイ」を耳にしたと推測される。

このように、荒井氏は長野県内での「シナイ」の使用は北信のみに限

られると結論つけたが、北信出身在住に限らず、高校生の半数以上が「行くシナイ」を使用もしくは耳にする経験があるという結果となり、使用地域の拡大が認められた。しかしながら、ある高校生は発言者を「上田市出身の友人」と回答しており、上田市にも広がった可能性がある。また、『全国方言辞典』に記載された「北信の若い人々の言い方」という点については、親世代での使用者がいること、耳にした経験から、若年層のみが使用するとは限らず、若年層の影響を受け、使用層も拡大したと考えられる。

三―二 「形容詞＋シナイ」

本節では、「形容詞＋シナイ」に着目し、「動詞＋シナイ」用法に拡張があることを調査し、考察していく。例文は「このカレー美味しいシナイ」と「この服かわいいシナイ」である。

(一) 「美味しいシナイ」のアンケート結果

「美味しいシナイ」を「使う」と答えた人は、高校生一三人(二三%)、親世代一人(三%)であった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生一人(二九%)、親世代五人(二六%)、「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生三三人(五八%)、親世代二五人(八一%)であった。

(二) 「かわいいシナイ」のアンケート結果

「かわいいシナイ」を「使う」と答えた人は、高校生一三人(二三%)、親世代はゼロであった。「使わないが聞いたことがある」と答えた人は、高校生一人(一九%)、親世代六人(一九%)、「使わないし聞いたこともない」と答えた人は、高校生三三人(五八%)、親世代二五人(八一%)であった。

(一)(二)の「形容詞＋シナイ」に関して、沖(二〇〇〇)は、用法の広がりについて以下のように述べている。

「あそこにおいしいケーキ屋さんあったよねえ。一緒に行くしない？(勧誘)」「このケーキ美味しいしない(確認)」などは、長野市で二〇年ほど前から聞かれるようになった新しい言い方。共通語だと意識されている。隣接する須坂市にあった「明日雨ダシネー？(明日は雨ではないか?)」という事態の確認の言い方が、用法の拡大をみて長野市若年層に広まったもの。

(沖(二〇〇〇)六一頁)

沖氏は、事態確認が用法の拡大を起こし、長野市の若年層に広まったと指摘する。また荒井(二〇〇〇)は「動詞＋シナイ」に着目し、「話の主体者が相手および発話者の場合には「勧誘」を表す意味になり、主体者が第三者の場合には、「同意」を求めたり、「推量」を表す意味になる(六一頁)」と述べるものの、その他の用法の考察はなされていない。

本稿調査結果の高校生の「美味しいシナイ」と「かわいいシナイ」のアンケート結果において、同一人物が同じ回答をしていないこと、男性が「か

わいい」という表現を使用する機会が少ないことを考慮しても、若年層での「形容詞＋シナイ」の用法の現状は、二割が使用しており、同じく二割が耳にする経験あり、六割は耳にする経験がないということが分かった。加えて、北信地域以外の地域においても、「形容詞＋シナイ」の用法は使用されていること、さらに「動詞＋シナイ」形（行くシナイ）のアンケート結果では「使用する」の回答率が二六％であるのに対し、「形容詞＋シナイ」では二三％であったことから、二つのことが考えられる。第一に、「シナイ」の用法が拡大していることである。第二に、現代の若年層は「形容詞＋シナイ」を用いることで、確認要求的表現を好んで使用していることである。確認要求表現とは、「話し手にとって何か不確実なことを、聞き手によって確実にしてもらうための確認を要求する」表現である（三宅二〇一一・二二頁）。「動詞＋シナイ」を用いて勧誘するよりも、「形容詞＋シナイ」用法を用い、相手に選択の余地を残しつつ、同意を促すコミュニケーションとなるため、若年層の使用が高まったと考えられる。次節ではこの「シナイ」形式が若者に取り入れられた経緯などを含め、さらに考察を行う。

四 文末詞「シナイ」用法

先行研究において、長野県の「シナイ」は北信方言とされ、北信地域でのみ用いられるとされてきたが、筆者の調査により、「シナイ」は北信以外の地域、とりわけ南信地域において用いられていることが分かった。

前節では、「動詞＋シナイ」で「勧誘」を表し、「形容詞＋シナイ」は「確認要求的な表現」とした。しかし、ここで述べる確認要求的な表現は、「確認要求表現」のように、相手に確実にしてもらうための確認要求をさすのではなく、あくまでも相手に判断・認識を促している表現である。^⑤ 文末詞「シナイ」を用いることで、従来の方言形式や共通語のように、聞き手に決断を迫る表現ではなく、相手に選択の余地を残す表現となると考えられる。アンケート結果からも明らかのように、主に若年層が「シナイ」形式を用いている。ゆえに、この「シナイ」形式は若年層に好んで使用され、使用層が広がったと思われる。若者に好まれる理由としては、現代の若者は、聞き手に一方的に決断を迫る表現を避け、相手に選択の余地を残す特有の表現であるためと推測できよう。加えて、さまざまな地域からひとつの場所に集まる環境では、仲間意識を持ちたいという概念が生じやすく、他者とコミュニケーションを図るうえで、強制的な表現を避け、やわらかく言い換えようとする現代の若者の感性によって、あえて「シナイ」を選択したと考えられる。

また、本調査の「シナイ」表現を「方言だと認識するか」「共通語と認識するか」という意識調査では、両者の回答が同数であった。しかし、「方言だと思っ使用している」人がいることから、従来の方言形式や共通語ではなく、あえて「シナイ」形式を用いていると推測される。つまり、選択の余地を残すやわらかい言い回しができ、なおかつ仲間意識をもつことのできる表現として、文末詞「シナイ」が若年層に根付いたと言

えよう。以上のように、現代の若者はコミュニケーションを図るうえで、聞き手に一方的に強制することを避け、選択の余地を残す表現を好んで使用していると言えよう。

おわりに

長野県における勧誘表現について、アンケート結果をもとに考察してきた。しかしながら、アンケートを配布した数に対し、収集でき、かつ調査結果に使用できたアンケート数が少なく、生徒と保護者の人数に差がでってしまった。また、アンケート中の「形容詞＋シナイ」表現について問う項目において、「この服かわいしいシナイ」という例文を提示したが、男性が「かわいしい」という形容詞を使用する場面が少なく、男女差が生じたと考えられる。

以上のような反省点は残るが、長野県における勧誘表現の現状を明らかにし、「ーシナイ」表現の広がりや、若者に好まれる表現形式であるなど、新たな指摘を述べられたと思う。以下、要点をまとめる。

○「行かズ」は、若年層5%、中年層一〇%が耳にした経験があり、北信地区の老年層に若干の使用者がいる。しかし、若年層と中年層のどちらも九〇%以上が耳にした経験もないため、「行かず」は衰退した方言形式である。

○「行かザー」は、中年層の使用者や耳にした経験がある回答が約四割となることから、現在でも老年層を中心に使用者が多い。しかし、

若年層と中年層では使用しない。

○「行くジャンカ」は、若年層で使用者がみられたが、中年層での使用者はいない。また老年層でも使用者が存する。

○「行きヤ」と「行けヤ」は、若年層と中年層の使用者が非常に少ない。「行きヤ」は耳にした経験もないという回答が、高校生・親世代ともに八割を超えるため、衰退したといえよう。「行けヤ」は耳にする経験が多いため、老年層を中心に使用している形式である。

○「行くメーカー」は耳にした経験があるということから、老年層で主に使用されているが、若年層・中年層ともに九割が耳にする経験もなく、衰退が認められる。

○「行くシナイ」は、若年層の半数以上が、使用または耳にしており、若年層で主に用いられる形式である。また、使用者が北信以外にもいることから、使用地域の拡大が認められた。「形容詞＋シナイ」表現についても、若年層の四割が使用・耳にすること、北信地域以外にも使用が広がることは同様である。

○「ーシナイ」表現をあえて用いる理由は従来の方言形式に比べ、選択の余地を残した表現であることに注目される。この表現は相手に強制せず、やわらかい言い回しをしようとする若年層のコミュニケーション方法に合致し、仲間意識を形成するために、若年層が多く集まる場所で起こりやすい現象だろう。このように、「ーシナイ」表現は、仲間意識を持つことができ、やわらかい言い回しで相手に

選択の余地を残すことができる新たな表現形式である。

本稿は、長野県における勧誘表現および文末詞の「―シナイ」表現の現状を示し、その用法について考察を行った。共通語化が著しいといわれる今日、若者が好む表現方法としてこのような新しい用法が用いられていることはとても興味深い。おそらく長野県における「―シナイ」のような類似的表現形式がほかにも存在するのではないだろうか。

注

- (1) 管見の限り、荒井(二〇〇〇)、沖(二〇〇三)、佐藤(二〇〇九)のみである。
- (2) 馬瀬氏の地域区分の地図を記載する。また、本稿で使した地域区分は、馬瀬氏との区分とは異なるため、後に載せる地図を参照されたい。
- (3) 「名詞＋シナイ」の形式が挙げられているが、本調査の地域での使用は認められなかった。
- (4) 「気づかれにくい方言」については、本稿の主旨とは異なるため、沖(一九九二)を参照されたい。
- (5) 一九七六年三月から一〇月までに著者が中部地方九県域の臨地調査に従い、質問調査によって得た資料に基づいて作成した方言地図である。被調査者は老年層を対象とする。
- (6) 動詞は行動決定を促し、形容詞は様態の同意を促す。

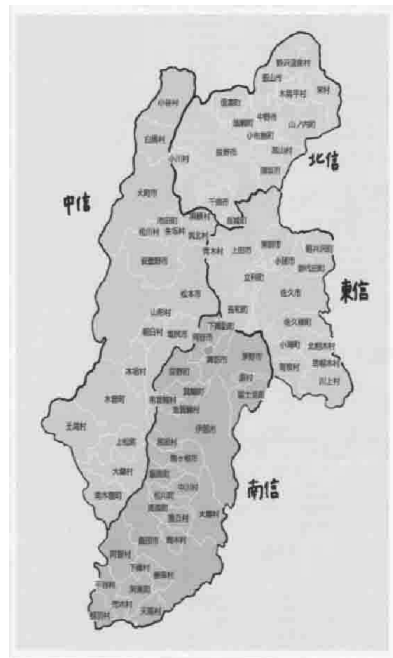
参考文献

- 荒井崇裕(二〇〇〇)「北信方言「シナイ」について」『ことばの研究』第一号
- 井上史雄(一九八五)『新しい日本語―《新方言》の分布と変化―』明治書院
- 江端義夫(一九七七)「中部地方域の方言についての方言地理学的研究(二)―「海へ行こう(勧誘表現)」の分布とその考察―」『広島大学教育学部紀要』第二部・二六
- 沖裕子(一九九二)「気づかれにくい方言」『月刊言語』第二号一一巻
- 沖裕子(二〇〇三)「〈小辞典〉ふるさとのことば 長野県」『月刊言語』第二号一卷
- 佐藤亮一(二〇〇九)『都道府県別 全国方言辞典CD付き』三省堂
- 彦坂佳宣(二〇〇九)「東海・ナヤシ地方の勧誘表現」『名古屋・方言研究会会報』第二五号
- 馬瀬良雄(一九九二)『長野県史 方言編 全一巻』長野県史刊行会
- 三宅知宏(二〇一一)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版
- 米川明彦(一九九六)『現代若者ことば考』丸善株式会社
- 公益財団法人八十二文化財団(二〇〇八)「長野県の地図から探す」
(<http://www.82bunka.or.jp/bunkashisetsu/map.php>)
(二〇一五年一月二五日取得)
- (つちや・あゆみ 本学二〇一五年度卒業生)

【図2 本調査の長野県地域区分】

【図1 馬瀬（1992）の地域区分図】

（出典…公益財団法人八十二文化財団（二〇〇八）による図に筆者が線や文字を追加した。）



表：出現数

		使ったことがある	使わないがきいたことがある	使わないし聞いたこともない	無回答
行かズ	高校生	0人(0%)	3人(5%)	53人(93%)	1人(2%)
	親世代	0人(0%)	3人(10%)	28人(90%)	0人(0%)
行かザー	高校生	0人(0%)	8人(14%)	48人(84%)	1人(2%)
	親世代	2人(6%)	11人(36%)	18人(58%)	0人(0%)
行くジャンカ	高校生	3人(5%)	10人(18%)	42人(74%)	2人(3%)
	親世代	0人(0%)	10人(32%)	20人(65%)	1人(3%)
行きヤ	高校生	0人(0%)	7人(12%)	48人(84%)	2人(4%)
	親世代	1人(3%)	4人(13%)	26人(84%)	0人(0%)
行けヤ	高校生	1人(2%)	13人(23%)	41人(72%)	2人(3%)
	親世代	1人(3%)	10人(32%)	20人(65%)	0人(0%)
行くメーカー	高校生	0人(0%)	5人(9%)	51人(89%)	1人(2%)
	親世代	0人(0%)	1人(3%)	30人(97%)	0人(0%)
行くシナイ	高校生	9人(16%)	20人(35%)	27人(47%)	1人(2%)
	親世代	1人(3%)	6人(19%)	24人(78%)	0人(0%)
美味しいシナイ	高校生	13人(23%)	11人(19%)	33人(58%)	0人(0%)
	親世代	1人(3%)	5人(16%)	25人(81%)	0人(0%)
かわいいシナイ	高校生	13人(23%)	11人(19%)	33人(58%)	0人(0%)
	親世代	0人(0%)	6人(19%)	25人(81%)	0人(0%)